

あーち通信 2006 年 2 月号 (第5号)

神戸大学大学院総合人間科学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

(H C センター・サテライト施設「のびやかスペースあーち」事務局)

〒657-0015 神戸市灘区鶴甲3 - 1 1

TEL 078-803-7972 / 7973 FAX 078-803-7971

e-mail: zda@kobe-u.ac.jp, itoa@kobe-u.ac.jp

特集 「あーち」の創設にあたって(5)

「あーち」でどんな研究をするのか

「あーち」は神戸大学の実践的研究の拠点と位置づけられています。いったいどんな研究をしようとしているの？

H C センター・子ども家庭支援部門の研究紹介

伊藤 篤 (神戸大学 H C センター、子ども・家庭支援部門)

今回は、「あーち」のドロップインサービス「ふらっと」にかかわって、神戸大学発達科学部にある H C センター・子ども家庭支援部門でおこなわれている研究の一端をご紹介します。

すでにご存じのかたも多いかと思いますが、このドロップインサービスは「あーち」で始まったのではなく、2004 年 4 月から「六甲道児童館」で週に 1 度・火曜日におこなわれてきた子育て支援の活動です。今も継続しています。なぜだか理由は明確ではありませんが、主に 0 歳代や 1 歳代のお子さんとお母さんに利用していただいています。

「あーち」でも「六甲道児童館」でも同じですが、そこには大学生 (社会人学生も含まれます) が遊びのボランティアとして協力してくれています。そこで、当部門では、研究テーマのひとつとして、「学生が子育て支援の場でボランティア活動をおこなうことにどのような意味があるのか」を取り上げました。大げさな問いに思われるかも知れませんが、でも、このことが明らかになれば、「ボランティアにはこんな意味があるんだよ」と胸をはって学生さんたちを募集することができずし、その成果は学生にとどまらず「地域の人がボランティア活動をする意味」にも拡張できる可能性もあるのです。

「ボランティア活動の意味」といっても漠然としていますので、まず、研究目的として、

「ボランティア経験によってどのような学習が成立するのか (= どのような能力が身についていくのか) を探索的に明らかにすること」としました。

「ふらっと」にかかわる学生さんには、活動後に毎回、その日に利用してくださった親子と自分がかかわった内容を記録してもらっています。そこで、半年から 1 年くらい継続して記録を残した 6 名 (少なくとも 10 回以上) を選んで、その記録を分析しました。分析の手順や統計的な手法になど小難しい部分は省略し、肝心の結果を書きましょう。

活動の前半は、かかわる相手 (母と子) を「観察」していることがほとんどでした。「観察」の中味は、客観的なもの・分析的なもの・批判的なものがありました。いずれにしても、多様な角度から対象を観察する能力がボランティア活動の出発点だといえましょう。ところが、後半になると、かかわる相手からの「情報収集」・かかわる相手に対する「共感」・かかわることによって生じる「課題意識」や「自分なりの試みと評価」といった記述が増えていきました。記述の増加は、それに対応する能力が身についたことを反映しています。

以上をまとめますと、何度かボランティア活動を続けていくと、かかわる相手であるお母さんとお子さんとの関係性が広がったり深まったりするため、ボランティアの立場が第 3 者的なもの (ながめている) から相互作用的なもの (関与する) へと変化していき、それに対応する諸能力が順次身についていくのだと結論づけられます。

読まれていかがですか？ 説得的な内容でしょうか？ ご意見を是非お聞かせください。

アクションリサーチから参加型の研究へ

津田 英二(神戸大学HCセンター、障害共生支援部門)

「あーち」で研究するってどういうこと?

「あーち」は実践的な研究の場です。というと、みなさんはどんな研究をするのだらうという好奇心をもたれるでしょう。ふつう、みなさんにとって研究なんか遠い世界の話でしょうからね。だいたい、研究っていうと、うずたかく積まれた分厚い本に囲まれているか、それともピーカーやフラスコや顕微鏡に囲まれてやるか、どちらかのイメージでしょう? 違いますか?

だいたい、私たちのように、しょっちゅう「あーち」に現れては掃除をしたりおしゃべりをしたり遊んだりしているのが研究の一環だなんて、誰も信じてくれないでしょうね。でも、実はこうしたことこそが、大切な研究の一部なのです。

なぜかという2つ理由があります。

第一に、「あーち」で行っているさまざまな試みと、「あーち」で行う研究とを、一体のものにしたいと思っているからです。研究は研究、実践は実践というはっきりした分け方にもたくさんの長所があります。けれども、あまりそれが行きすぎると、研究が何のための研究か分からなくなります。研究のために研究をしているという状況は、学会などに行くときとたくさんあります。掃除をするのも「あーち」の重要な実践の一部です。だから、研究にとって価値のないこと、などでは決してないのです。

第二に、「あーち」での研究そのもののあり方を模索することが、研究になると思っているからです。研究というのは、研究方法によって意味も価値も大きく変わります。少し前までは、客観性(誰にとってもそうだということ)とか普遍性(どんなことにでも当てはまるとのこと)とかいったことがとても大事にされていました。そうすると、たくさんの事例に当たらないといけないので、ひとつの事例だけに取り組むだけでは、研究ではないといわれていたこともあったのです。けれども、最近は少し違います。ひとつの事例をどこまで深く掘り下げることができるかということが、研究として認められようようになってきたのです。ひとつひとつのことをとことんまで掘り下げていくことで、普遍性が見えてくるという考えが強くなってきました。でも、ひとつの事例を掘り下げていくというのは簡単ではありません。例えば、ある子どもと一緒にいる子どもを打ったとします。そんなことひとつとっても、打った子にとって、打たれた子にとって、打ったこの親にとって、打たれた子の親にとって、それぞれ異なる意味をもつでしょう。簡単にその出来事を意味づけ、データにすることはできないのです。だから、どうやって「あーち」での実践を掘り下げていくかということ、その方法自体が研究になるのです。

何を明らかにしようとするか

かといって、研究方法のための研究なんて、空しいですよ。これでは、結局研究のために研究をやっているようなものです。

そこで、私はここでどんな研究をしようとして

いるのか、ということをお話しておこうと思います。でも、卒業論文の指導などして実感することが多いのですが、どんなことをめざして研究するかということがはっきりしたら、その研究は半分終わったようなものです。実は研究の生命線は、何を明らかにしようとするかということにあるのです。だから、私自身、あんまり明快な答えは出せません。言い訳がましく聞こえるかもしれませんが、事実なのでしかたありません。だいたいこんな方向といったアバウトな答えなのです。

身も蓋もないくらい簡単に言うと、「あーち」自体、あるいは「あーち」のさまざまな仕掛けがどのような影響をもたらすのか、ということです。でも、こんな答えではほとんど何の意味もありませんよね。「あーち」がどのような特色を持った施設であるのか、「あーち」のさまざまな仕掛けとはなにか、影響とは誰に対するものか、そういったことが少なくともはっきりしないと、何をやってんだかさっぱりわかりません。

でも、これにひとつひとつはっきりさせていくことが、たいへんな作業で、しかもとても大切な研究の一部なのです。例えば、「あーち」とはいったい何なのか、といったことひとつとっても、他の「あーち」のような施設とどこが違うのか、同じような試みが昔あったとしたら、どのような結果を得ることができたのか、神戸市あるいは灘区、あるいは灘中央地区にとって「あーち」はどのような存在なのか、どのような社会現象との関係で「あーち」の特色を説明できるのか、そういった作業がぜんぶ必要です。私は、まず始めに「あーち」でやる研究はこれだと思っています。

でも、やはり私が専門的に追究したいと思っているのは、知的障害のある成人の活動が地域社会を変化させていくということが、どのようにして起こるのか、そもそも起こりえるのか、またそれはどのような変化なのかといったことです。指をくわえて見えていても、目の前で壮大な劇が始まるわけではありません。知的障害のある人たちが地域を変える、社会を変えるなどということが、これまでどれだけ起こってきたのでしょうか?

この研究は、変化を起こす、仕掛けていくということから始まるのです。

アクションリサーチから参加型研究へ

実践と研究との関係がどんどん近くなって、はじめに現れたのが参与観察という方法です。研究者は実践に関わりますが、壁のように目立たないように、実践に影響を与えないようにジューツと目立たないでいるという方法です。研究者が実践に立ち会って、そうでない時と実践に違いが出てきたら、研究は失敗だというわけです。「Aさんはあまり話をしない消極的な人です」という観察があったとします。けれども、その観察結果は、実はAさんがその研究者を嫌いだから起こったことかもしれません。ふだんのAさんは周囲をいつも笑わせているような人かもしれません。

いやいや、違う違う。「あーち」でめざそうとしている研究は、そんなものではありません。変化させないように頑張るのではなく、逆に変化を起こそうとしているのですから。

アクションリサーチという研究のあり方があります。アクションはアクション仮面のアクションで、リサーチは研究という意味です。何？アクション仮面を知らない？クレヨンしんちゃんに出てくるヒーローですよ。そんな下品なアニメは見ませんって？そうですよね。うちの娘にも見せていません。でも、私は好きです。

さて、アクションリサーチでは、研究者はどんな世界に変化を巻き起こします。どんな仕掛けをしたらどんな結果が生み出されるかという、まさに「あーち」にぴったりの研究のあり方です。

でも、私は、このアクションリサーチという研究は最終的に目指すべき研究ではないと思っています。だって、仕掛けられた世界に住んでいる人たちは、結局仕掛けられる一方で、研究が自分た

ちの力にならないからです。アクションリサーチによって、その世界が誰にとっても住みやすくなったというのだったら、それでいいでしょう。でも、変化はだれにとってもよいものだという保障はありません。アクションリサーチを仕掛けられた結果、対象の世界がゴーストタウンのようになってしまったら、目も当てられません。

で、私が目指そうとしている究極の研究は、参加型研究です。そう、実践している人たちがみんな自分たちの研究をやっているというような研究です。ふつつ実践家は、放っておいても、「こんなふうにならなければ、あんなふうになるんちゃうやらか」と考えます。研究は、それに「仮説」などという大仰な名前を付け、ほんとうにそうなるのか調べてみる（仮説を検証する）というものなのです。どうせだったら、それをみんなでやろうよ、というのが、私のやろうとしている研究です。

誰か、参加してみようっていう人はいませんか？（っていう声かけも、研究の一環です。）

「あーち」での、いろいろなプログラム（2月）

- 赤ちゃんからおとなまで、誰でも参加できるプログラム
 - 自由に楽しむ絵の世界
 - 音楽の広場
 - お話の国
 - 紙芝居
 - 折り紙
 - 人形遊び
 - 誰でもたまり場
- 3歳くらいからおとなまで参加できるプログラム
 - らくがきおばさんがやってくる
 - メダカ親子クラブ
 - 立体の紙工作
 - サイエンス・プログラム
- 赤ちゃんのためのプログラム
 - ほのぼの音ランド
- 障害のある子どもたちのためのプログラム
 - ぼっとらっく（予約制）
 - ほっと（予約制）
- おとなのためのプログラム
 - （お子さん連れの方もどうぞ）
 - 心に浮かぶ言葉・ことばの広がり
 - 筆をもとう
 - お母さんのおしゃべり広場

2月の特別プログラム

- 2月4日（土）11時～12時半 音楽の広場の鉄人、菊地美伽さんのプログラム
- 2月4日（土）14時半～16時半 サイエンスプログラムは、プラネタリウムづくり（予定）
- 2月12日（日）障害のある人たちが地域で当たり前のように生活するためのたまり場づくりセミナー
- 2月17日～23日（予定）たんぼぼ作業所ギャラリー＆パフォーマンス
- 2月22日（水）たんぼぼ作業所のみなさんとフェルトでスカーフをつくる

ご寄付について

「あーち」を支援する任意団体「子育てと共生を考える会」が創設されました。寄付金はこちらの会を通して大学に対する寄付となり、大学から「あーち」へ予算配分されます。ご寄付は、伊藤が津田に直接お渡しいただくか、下記口座にお振り込みいただき、住所、氏名、電話番号をお教え下さい。

三井住友銀行 六甲支店 普通（口座番号）4195504（名義）子育てと共生を考える会